

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「契丹語・契丹文字研究の新展開」（平成23年度第1回研究会）

日時：平成23年7月9日（土曜日）午後13:30時より午後17:30時

場所：東京外語大学アジア・アフリカ研究所 第304号室

報告者名（所属）：

1) 鈴木俊哉（広島大学）

「西夏・女真・契丹文字の国際標準コード化動向について」

コンピュータやネットワーク上でのテキストデータを符号化する方式(文字符号)の国際標準の一つにISO/IEC 10646(いわゆるUnicodeのベースとなっているもの)があるが、2010年4月に契丹小字の符号化提案が中国から提出された。契丹小字を汎用的なテキストデータの中で符号化できる研究状況になっているのか疑問があるため、この提案について、先行して議論されている西夏および女真文字の符号化提案の経過と比較しながら、提案が提出されるに至った背景を議論する。

1. 西夏文字標準化提案(2007～)

西夏文字の標準符号提案は2007年にバークレーの文字符号専門家、Richard Cookによって最初の提案が出された。この提案は既存の研究書の見出し字を整理統合したもので、Richard Cook独自の研究志向が反映されたものではないが、中国からは提案者が西夏文字の専門家の提案ではなく、また、文字表に使われた新規開発のフォントについても出版に用いられてきた履歴がないという理由で、強い反発が生じた。また、研究書によっては文字の同定基準に揺れがあり、どの研究書を基盤とするか、その研究書とずれた同定を行う例外としてどのような条件をとるかの議論が何年も続いており、現時点でいつ標準化されるか目処がたっていない。当初は自分のフォントを持っているRichardが主導権を握って議論を進めていたが、Richardが西夏文字に関連する作業時間が十分とれなくなるのと並行して、別にフォントを合成したMichael Everson(アイルランド、規格専門家)が主導権を握った状態になっている。中国は四角號碼に類似した排列方法や、景永時の印刷系との互換性を強く主張したが、現在ではマルチカラム文字表で字形を例示し、往復変換に配慮するという程度の扱いになっている。文字の同定に問題があっても往復変換を保証しなければならないと明記されているのは文字鏡の西夏文字フォントである。

2. 女真文字標準化提案(2009～)

女真文字の標準符号提案は2009年にJason Glavyというアマチュアのフォントデザイナーが作成した文字表にはじまる。Jasonのフォントは金啓孫「女真文辞典」に基づくが、辞典の

見出し字を全て作字したものではなく、漢字に類似したものが見つからなかったものだけを作字している。そのため、文字表にも日本語フォントや中文フォントが明朝体・ゴシック体の整合性なしに入り混じっている。この提案は文字表をUnicode Consortiumのメンバーが組むなど協力しているが、正式な提案書としてのフォーマットには沿っていない。これを受けて、中国はすぐに正式なフォーマットでの女真文字の提案書を作成した。中国の提案書では、全て統一した楷書風デザインでの提案書であり、Jasonの文字表との対応は示してあるが、Jasonの文字表に対する論評は与えていない。その後、中国提案をベースにMichael Everson(アイルランド)、Andrew West(英)らによる議論が行われたが、現時点では中国は標準化を急いではおらず、停止状態にある。

3. 契丹文字標準化提案(2010～)

契丹小字標準化提案は中国による女真文字提案の直後に提出された。文書の体裁等は女真文字の提案書とほとんど同じである。西夏文字や女真文字に比べ、急いで標準化すべきコーパスがあるわけでもなく、また、提案された符号化方式では契丹小字は原字だけを符号化しており、合字をどう表示するかに関する検討がない。このような状態で提案してきた理由は、おそらく西夏文字や女真文字の符号化提案が中国以外から提案されたこと、その内容について中国の研究者の観点では不満があることから、不十分な内容であっても先に提案しておくことで非専門家からの提案を予防しようという動機が想像される。

西夏文字・女真文字に比較して、契丹文字は解読も遅れており、文字集合を現段階で確定すること自体に危険性がある。現在の中国の契丹小字提案も原字集合の正当性について議論しておらず、提案された範囲内でどのようなデータがどの程度の精度で符号化できるのかも明らかでない。研究がより進んでいる女真文字などの標準化作業が進んでいないことから、契丹小字の符号化作業が速いペースで進むとは考えづらいが、研究者の観点から寄書を準備しておくことが望ましい。

2) 白石典之(新潟大学)

「内モンゴル新巴爾虎左旗出土の契丹大字資料について」

報告者は2011年3月9日から3月16日まで、中国内モンゴル・フルンブイル地域の遼～元代を中心とする、考古資料収集を目的とする調査旅行をおこなった。そのなかで、フルンブイル(呼倫貝爾)市新バルガ(巴爾虎)左旗において、未公開の契丹大字と思われる資料を実見する機会を得た。本報告はその概要である。

本資料は新バルガ左旗の中心、アムガラ(阿木古郎)鎮にある旗文物管理所の陳列室に展示されている。所長のバトムフ(巴圖孟克)氏のご厚意により実見することができた。資料は展示用ケースに入っていて、残念ながらガラス越しでの観察であった。

素焼き無釉のタイル(縦30cm強、幅30cm強、厚さ6cm程度)の、表面の右側縁近くに、縦書きで1行、10ないし11文字が刻書されていた。

バトムフ所長によると、このタイルはブハトルゴイ（布哈陶拉盖）古城出土だという。ブハトルゴイ古城は、新バルガ左旗の西南にあるバインタラ（巴彦塔拉）ソムにある。フルンブイル市の中心ハイラル（海拉尔）の西南約 200km、アムガランから西へ 30km に位置する。国家文物局主編の『中国文物地図集』（内蒙古自治区分冊下巻 474 頁、2003 年）によると、元代の城跡とされている。しかし、タイルといっしょに出土したと思われる、展示されている陶器をみると、あきらかに遼代（契丹時代）の特徴が残る。城は遼代に築かれ、元代まで使われていた可能性がある。積雪のため現地踏査はできなかったが、城跡の調査が熱望される。

本文字資料であるが、バトムフ所長によると、すでに北京の研究者が実見しているという。ただ、管見によるとその報告は未発表のようだ。その研究者の意見では契丹大字とのことであるが、文字の掘り込みが浅く、一文字一文字の判定が難しく、検討の余地があることを記しておきたい。

遼（契丹）にとってフルンブイル地域は要地のひとつであった。建国当初から屯田などを行い、積極的に介入していたことが『遼史』からうかがえる。しかしながら、その情報はごくわずかで、いまだ不明な点が多い。本資料が契丹大字であるならば、当該期のフルンブイル地域の実情を伝えている可能性も期待できる。資料の公開と研究の進展が切に望まれる。

3) 近年の契丹研究に関する情報交換（全員）

近年新発見された契丹文字資料に関してを中心に、情報交換を行った。また、10月に予定される公開シンポジウム、3月に予定されるワークショップに関して討議を行った。